

独自アンプを内蔵してLDACにも対応

シリーズ末弟でも、

Bluetooth SoCに頼り切らない独創の音響技術で音質を磨き上げた
HIFIMANの完全ワイヤレス「Svanar(スヴァナー) Wireless」シリーズ。

今春、そのSvanarに大幅プライスダウンを実現した末弟「Svanar Wireless Jr」が登場した。

ここでは3兄弟になったラインアップの紹介と同時に新モデルの魅力を解説しよう。

文／高橋 敦 Atsushi Takahashi 写真／田代 法生

ノイズキャンセリング
完全ワイヤレスイヤホン

HIFIMAN

Svanar Wireless Jr

¥21,560(税込) ▶投票 No.116

SPEC ●通信方式:Bluetooth Ver.5.2 ●対応コーデック:SBC、AAC、LDAC ●ドライバー:口径:非公開 ●連続再生時間:7時間(ANC ON時/ケース込み32時間) ●質量:8g(イヤホン片耳)、83.7g(ケース) ●付属品:イヤーチップ(シリコン S×1、M×2、変形M×1、ダブルフランジ×2)、低反発(S×2)、充電ケーブル

CHECK

Svanar Wirelessシリーズ 各モデルの差とは？

型番	Svanar Wireless	Svanar Wireless LE	Svanar Wireless Jr
価格	¥79,860(税込)	¥47,190(税込)	¥21,560(税込)
HYMALAYA DAC	○	○	×
アンプ	AB級バランスアンプ		
ドライバー	トポロジーダイアフラム		
アクティブノイズキャンセリング		○	
LDAC	○	×	○
ワイヤレス充電	○	×	×



不動の「音質特化」

シリーズの個性である明瞭な音、低域は太い

HIFIMAN「Svanar Wireless」シリーズに末っ子的なエントリーモデル「Svanar Wireless Jr」が追加された。超高音質完全ワイヤレスとして名を馳せるこのシリーズの中ではいちばん手頃な価格を実現。それでいて次男モデル「Svanar Wireless LE」をスペック的に上回る部分もあるのだから何とも生意気な末っ子だ。価格だけではなくもっと積極的な理由でこちらを選ぶのもあり。そんなモデルに仕上げられている。

ということでシリーズ全体の構成と特長から確認していこう。シリーズの頂点「Svanar Wireless」は、完全ワイヤレスの常識を覆す超高音質を達成した超ハイエンドモデル。R2Rラダー方式による独自のDACシステム「HYMALAYA DAC」、特殊メッキによる幾何学パターンで特性を最適化した振動板「トポロジーダイヤフラム」、その振動板を正確に動作させるAB級バランス駆動の「アンプモジュール」といった技術がその超高音質の源だ。続いて登場の「Svanar Wireless LE」は、それらの技術をすべて継承しつつ大幅なブライズダウンを実現した、ハイエンドサウンド&ハイコストパフォーマンスなモデル。ハウジング素材をカーボンファイバーから一般的なプラスチックに変更、高音質コーデックLDACとワイヤレス充電への対応を省略などで、そのブライズダウンが実現されている。

そして今回の主役「Svanar Wireless Jr」は、ハイエンドサウンド&“超”ハイコストパフォーマンスなモデルだ。HYMALAYA DACこそ非搭載となったが、HIFIMANイヤホンの代名詞的な技術であるトポロジーダイヤフラム、およびアンプモジュール搭載は堅持。加えて何とLEは非対応のLDACにこちらは対応! LDAC対応スマホのユーザーにとっては大きなポイントになるはずだ。LDACのポテンシャルを発揮できる良好な電波状況下、たとえば自宅利用などを

メインに考えるなら特に、「あえてのJr」という選択が正解になることもあるだろう。

実際にLDAC対応スマホと組み合わせて聴いてみると、このモデルならではのサウンドの魅力も見えてくる。DAC周りの変更に伴ってか、シリーズのこれまでのモデルとはチューニング傾向も少し変えられているようなのだ。シャキッとした鋭さがありつつ嫌な刺さり方はしない、良質な高域描写は両機と共通。YOASOBI『アイドル』のエレクトリックサウンドのエッジ感の表現、散りばめられたすべての音を届けてくれる明瞭さ。そういったところの見事さはシリーズの特長としてしっかり受け継いでいる。その上で低音表現では独自の個性を発揮。これまでのシリーズ機は比較的にタイトな低音だったのに対して、このJrは低音のボリューム感を積極的に活かした表現が持ち味だ。その持ち味はアコースティック楽器中心のサウンドには特にフィット。たとえばジュリアン・ラージ『Double Southpaw』を聴けば、ウッドベースの響きをたっぷりと大柄に描き出し、その場の空気をより体感的により生々しく伝えてくれる。

そのサウンドに加えてもちろん、ハイエンド完全ワイヤレスイヤホンに求められる要素はおおよそ網羅。同社が「ディープ」と誇る消音性能のアクティブノイズキャンセリング。ANC使用で約7時間とシリーズ最長の連続再生時間。IPX5という必要十分な防水性能。そしてイヤホン本体もケースも今回はホワイトをまとっての登場となったそのルックス。一目でわかるシリーズ共通のフォルムでありつつ、これまでにはない色合いによって新鮮な印象も生み出されている。

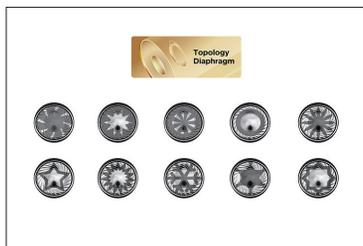
コストパフォーマンスを高めたモデルであり、しかしそれだけではない。シリーズのエントリークラスとしての理想的な在り方。それが実現されているモデルだ。

ココにこだわりアリ! ① アンプを別に搭載



一般的な完全ワイヤレスイヤホンはBluetooth SoCに内蔵したアンプを使うことが多いが、本機は個別にアンプを搭載。しかもAB級のバランス駆動を実現している。

ココにこだわりアリ! ② 独創のトポロジー振動板



Svanar Wirelessシリーズは幾何学パターン特性を最適化したトポロジー振動板を採用するが、実はモデルごとにパターンは異なる。本機の音づくりのために新規設計したポイントだ。

ココにこだわりアリ! ③ LDACに対応



ミドルクラスの「Svanar Wireless LE」には採用されなかったLDACコーデックに対応。対応スマホをお持ちの方は、上位モデルではなく本機を購入するのもアリだ。